

立教大学学術推進特別重点資金 (立教 S F R)
 大学院生研究
 2007年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院	文学研究科	日本文学 専攻
指導教員	所属・職名	氏名	
	文学部・教授	小嶋 菜温子 印	
自然・人文の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/>	個人・共同の別	<input checked="" type="checkbox"/> 個人 <input type="checkbox"/> 共同 名
研究課題名	イメージとテキストをめぐる王朝文芸の図像学的比較研究—享受史的視点を中心に—		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	文学研究科・日本文学専攻 博士課程後期課程1年	青木 慎一 印	
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
研究期間	2007 年度		
研究経費	200 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

申請者は、『源氏物語』を中心とする平安時代の物語文学の分析と、後世の絵画作品における絵画化の問題を主たる関心としている。本研究では、『源氏物語』や『竹取物語』といった平安時代の物語文学が、後世の絵巻・絵本といったメディアのなかでどのように絵画化されているのかを把握し、その過程でテキストがいかに解釈され、絵巻・絵本でどう意味付けられているかを考察し、後世における王朝文芸の享受の様相を明らかにすることを旨とする。また、前述の享受的視点によって明らかになる中・近世における王朝文芸の解釈から、現代における王朝文芸の解釈の問題点を見直すことで、享受という一方向にとどまらない双方向的な研究を企図している。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[文学] [図像] [享受]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

①本年度の研究活動の経過は以下の通りである。

A、近世刷物の調査

於：鴨川市郷土資料館

日時：絵007年8月2日

B、奈良絵本「住吉物語」を中心とする調査

於：西尾市岩瀬文庫ほか

日時：2007年11月17・18・19日

C、口頭発表

於：立教大学日本学研究所 第33回研究会

日時：2008年1月26日

題目：「奈良絵本源氏物語について」

D、口頭発表

於：国際研究理論システム研究会 第4回研究会「視覚性と日本文学」

日時：2008年1月27日

題目：「源氏絵における女性像—徳川・五島本「源氏物語絵巻」を中心に」

②研究成果の概略

本年度中は『竹取物語』および『源氏物語』の絵画化の問題に焦点を絞り、各作品の図像資料をあつかってきた。『竹取物語』では本学所蔵の「竹取物語絵巻」を中心に研究を進めた。本絵巻では、上中下巻の計3巻の翻刻を担当し、その成果は「立教大学蔵『竹取物語絵巻』解題と翻刻」(共著)として、『立教大学大学院日本文学論叢』に掲載された。

『源氏物語』については、徳川・五島本「源氏物語絵巻」を中心に、源氏絵屏風や源氏画帖の絵や本文との比較研究を行った。徳川・五島本「源氏物語絵巻」に関しては、本年度は柏木～御法段に登場する女三宮に着目して論文化した(「源氏物語絵巻」における女三宮—鈴虫第一段の解釈を中心に)。本絵巻の柏木～御法段の間で女三宮が焦点化されるのは柏木第一段、柏木第三段、鈴虫第一段である。従来、鈴虫第一段で中心的に描かれている女性が女三宮と解されてきたが、近年の復原調査によって、その女性が女三宮ではなく、女房であることが明らかになった。この女性が女房であるとする、女三宮方の邸を絵画化したにもかかわらず、邸の主を描いていないことになる。本論文ではその意図を読み解くべく、女三宮の描かれ方を追った。すると、柏木第一段は畳に臥し、顔を覆う女三宮が描かれていたが、柏木第三段では几帳の裾によってその存在が暗示され、鈴虫第一段になると邸が女三宮方であることのみが、女三宮の存在を示す唯一の手がかりとなっていることが分かった。この一連の造型は存在を描くところから描かれぬ方向へ向かっており、女三宮の図像が後景化していくと位置づけた。そうした描き分けの意図は、女三宮の源氏方にたいする拒否のメッセージがこめられていると解した。この解釈を導くにあたっては、鈴虫第一段で女三宮の姿を描かないことに特別な意図を読み取ることの妥当性を他の源氏絵の情景選択ふまえて考察した。貴族層における享受を考える意味で重要な土佐光吉・光則の源氏絵や大衆の享受を考える上で見逃せない近世の画帖、絵入版本の挿絵などの鈴虫段の情景選択との比較検討では、女三宮の図像を描くか暗示するものがほとんどで、女三宮を描かない作例は確認できなかった。ここからは『源氏物語』の鈴虫段を絵画化する際には女三宮を描くことは不可欠であり、むしろ女三宮を描かないことにこそ特別な意図を読み取ることができることを指摘した。さらに、本論文では上記のような『源氏物語』の享受史的な把握のみならず、その結果から現代の『源氏物語』解釈との相違点も確認できた。その最も顕著な点が物語におけるいわゆる脇役の扱い・捉え方であった。現代においては主役に付随して見られがちである一方で、古代においては必ずしも主役に付随するばかりの存在でなく、時には主役を追いつめるような主体的役割となる可能性を看取した。

このようにいわれる脇役の存在を『源氏物語』の解釈として考察したものを「夕霧の「生ひ先」—成長をめぐる表現方法について」として、『立教大学日本文学』に投稿した。また、同様の視点から「宿木」巻に置かれた、夕霧の詠とされる和歌が、夕霧ではない可能性を論じたこともある(『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』、世界思想社)。このほかにも『源氏物語』の通過儀礼がいかに語られるかを一覧した「源氏物語通過儀礼一覧」(小嶋菜温子編『王

研究成果の概要 つづき

朝文学と通過儀礼』、竹林舎) や『源氏物語』の和歌に関する論考を挙げた「源氏物語と和歌に関する参考文献ガイド」(『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』、世界思想社) なども成果の概要として挙げられる。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① 雑誌論文

- ・宮腰直人・目黒将史・青木慎一、「立教大学蔵『竹取物語絵巻』解題と翻刻」、『立教大学大学院日本文学論叢』、第七号、2007、pp. 1～35
- ・青木慎一、「『源氏物語絵巻』における女三宮—鈴虫第一段の解釈を中心に」、『立教大学大学院日本文学論叢』、第七号、2007、pp. 36～51
- ・青木慎一、「夕霧の「生ひ先」—成長をめぐる表現方法について」、『立教大学日本文学』、第九十九号、2007、pp. 14～25

② 図書

- ・長谷川範彰・青木慎一、「宿木巻」、加藤睦・小嶋菜温子編『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』、世界思想社、2007、pp. 290～293
- ・長谷川範彰・青木慎一、「源氏物語と和歌に関する参考文献ガイド：概説」、加藤睦・小嶋菜温子編『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』、世界思想社、2007、pp. 305～309
- ・青木慎一、「源氏物語と和歌に関する参考文献ガイド：参考文献」、加藤睦・小嶋菜温子編『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』、世界思想社、2007、pp. 310～327
- ・青木慎一・長谷川範彰・馬場淳子「源氏物語通過儀礼一覧」、小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』、竹林舎、2007、pp. 553～569
- ・青木慎一・石井宏枝・酒井朱夏「王朝文学と通過儀礼参考文献」、小嶋菜温子編『王朝文学と通過儀礼』、竹林舎、2007、pp. 570～581

④ その他

<学会発表>

- ・青木慎一、「『生ひ先』表現からみた夕霧—『源氏物語』の表現方法をめぐって」、立教大学日本文学会大会、2007年6月30日、立教大学7号館

<その他の印刷物>

- ・青木慎一、「絵に託されたメッセージ」、『カレイ』No. 57、pp. 2、2007